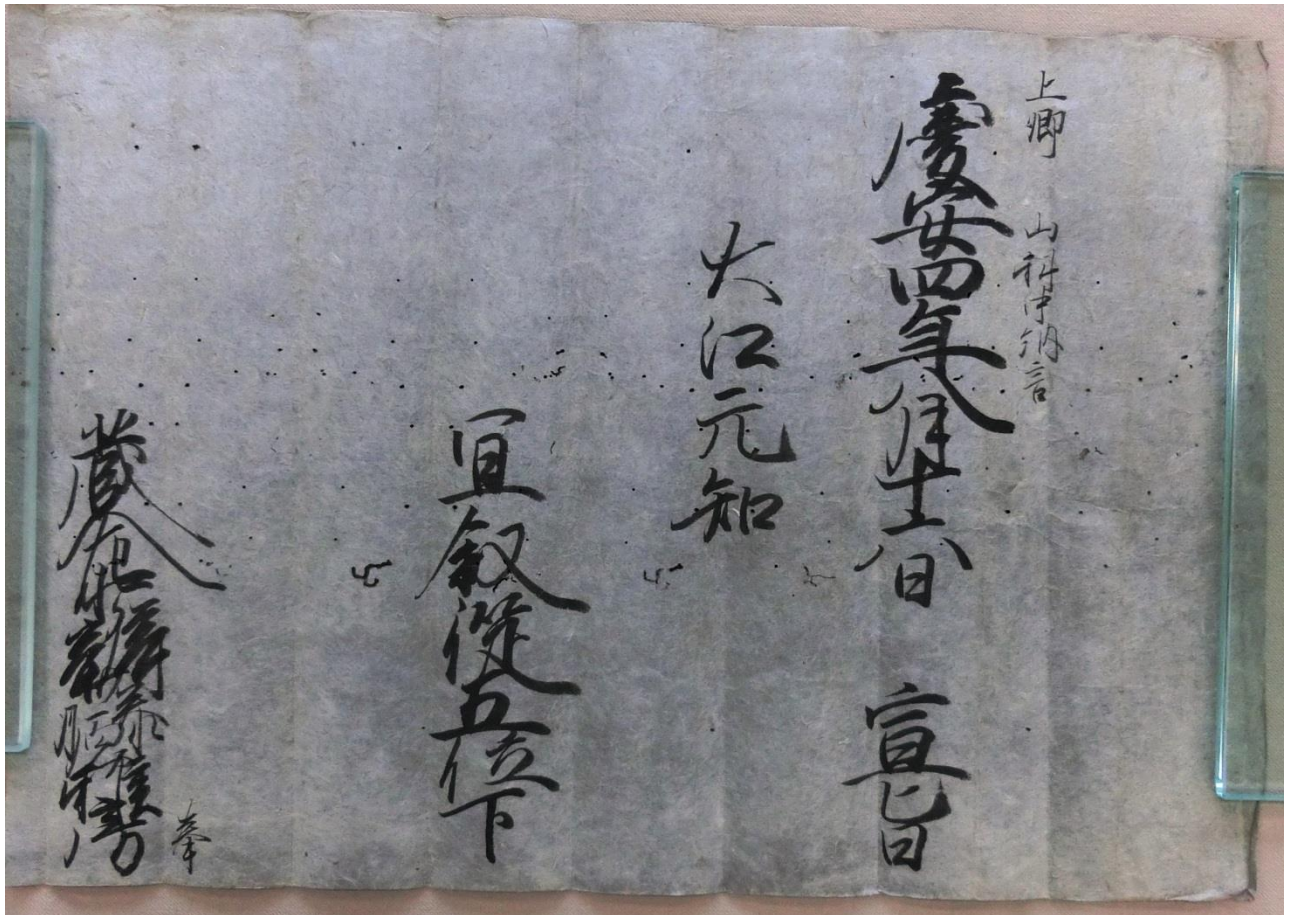


平成 28 年度資料小展示

きよすえ もうりけ もんじょ 清末毛利家文書

-もうひとつの近世大名家文書-



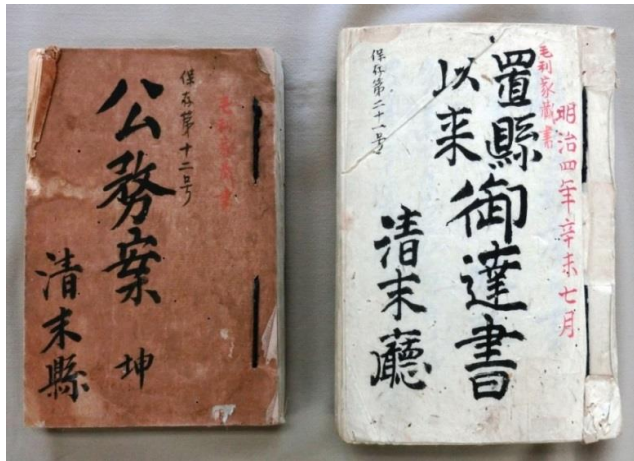
口宣案（毛利元知從五位下） 慶安 4 年（1651）

当館が所蔵する近世の大名家文書としては、「毛利家文庫」と「徳山毛利家文庫」がとてもよく知られています。しかし当館はもうひとつ、「清末毛利家文書」という近世大名家文書も所蔵しています。萩藩の支藩・清末藩を治めた大名・清末毛利家にかつて伝来していた文書群です。国文学研究資料館（東京都立川市）にもその一部が収蔵されています。

当館所蔵「清末毛利家文書」には、清末藩政に関わるものは多くありませんが、清末毛利家の「家」としての活動に関わるものを中心に、明治初期の清末藩・清末県に関わるもの、幕末期の当主元純の伝記史料などのほか、赤間関を描いた絵図や、古器物や絵巻、朝廷儀式などを模写したものなど、絵画資料を数多く含んでいることが大きな特長です。美術史研究者からも注目される文書群です。

今月と来月、この「清末毛利家文書」を紹介します。 *途中展示替えをします。

清末毛利家文書にはさまざまな資料が含まれています。



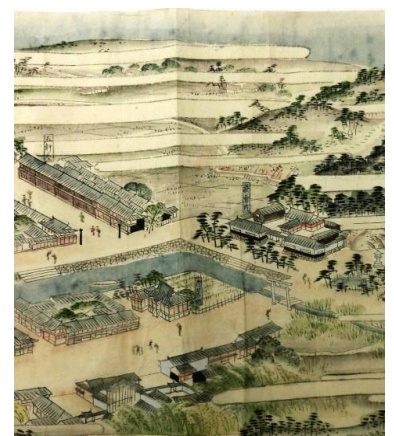
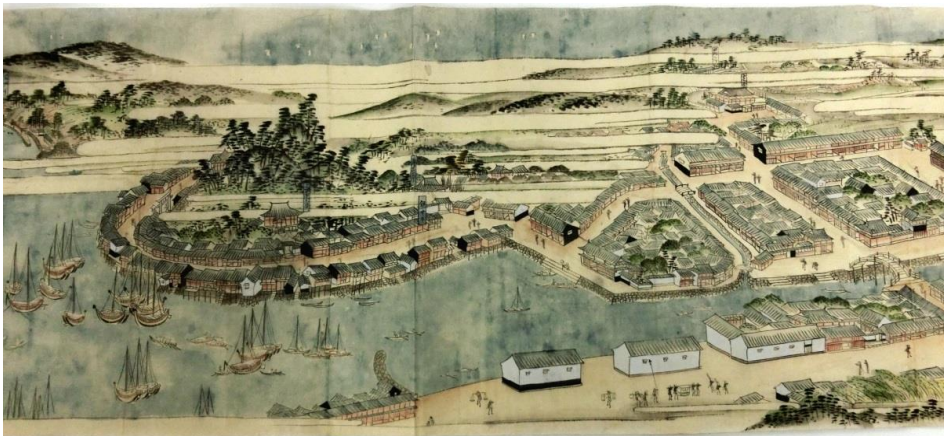
公務案と置県以来御達書 明治4年(1871)

左は清末藩・清末県から明治政府への上申文書、右は明治政府から清末藩・清末県への伝達文書を控えたもの。版籍奉還後の清末藩、廃藩置県後わずかの間存在した清末県に関する貴重な文書。



御家史材料 大正10年(1921)

家史編さんのため作成された史料集。4冊。筆写史料だけでなく原文書も綴られている。毛利家編輯所に依頼して作成された「毛利元純公年表」「毛利元純公御履歴材料」なども残る。



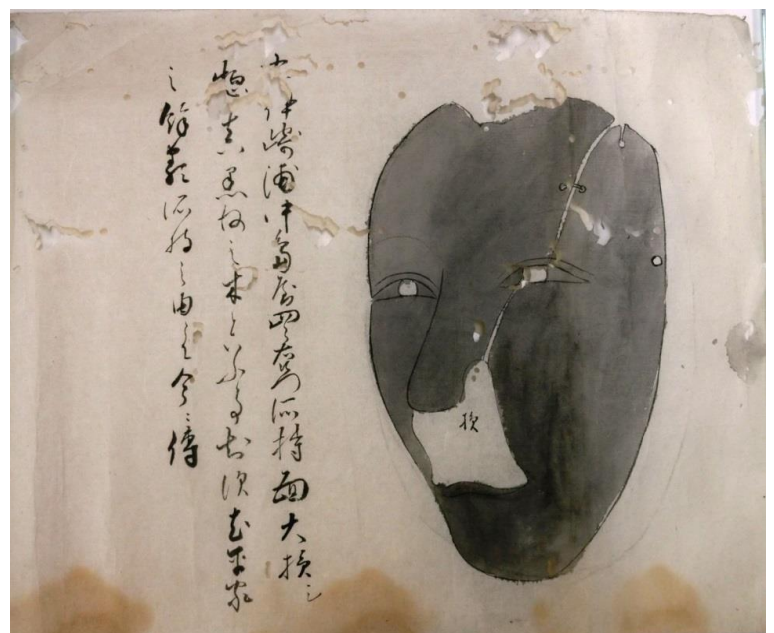
赤間関絵図 年未詳

江戸時代の赤間関（下関）を描いた絵図。伊崎のまちなみや萩藩会所（右）などがくわしく描かれている。他の絵図の模写か、オリジナルなものかは今後の検討課題。

古器物・珍物写真 江戸時代

古器物や珍物を模写した図。

右は赤間関伊崎浦の中嶋四郎右衛門が所持していた御面を模写した図。「平家の余類所持の由にて今に伝」と説明している。





毛利元忠肖像画 岡精一作 明治31年
(1899)

明治期の当主・毛利元信を描いた油絵。明治期の油絵としてはこれまでほとんど知られていないもの。作者、年代がはっきりしている点でも貴重。



鞍馬寺縁起絵巻写 永正10年(1513)／江戸時代写

室町幕府管領細川高国が、狩野派初代絵師・狩野に命じて制作させた絵巻の模写。原本は伝来せず、模写ながら貴重な資料。当館蔵「清末毛利家文書」には絵巻の模写も多いが、「文化人」として評価される4代藩主匡邦の指示、彼の興味関心から模写されたものではないかと推測される。

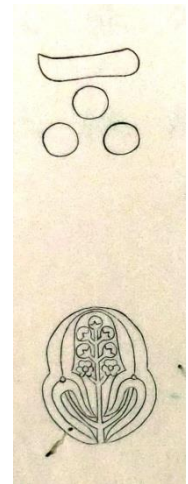
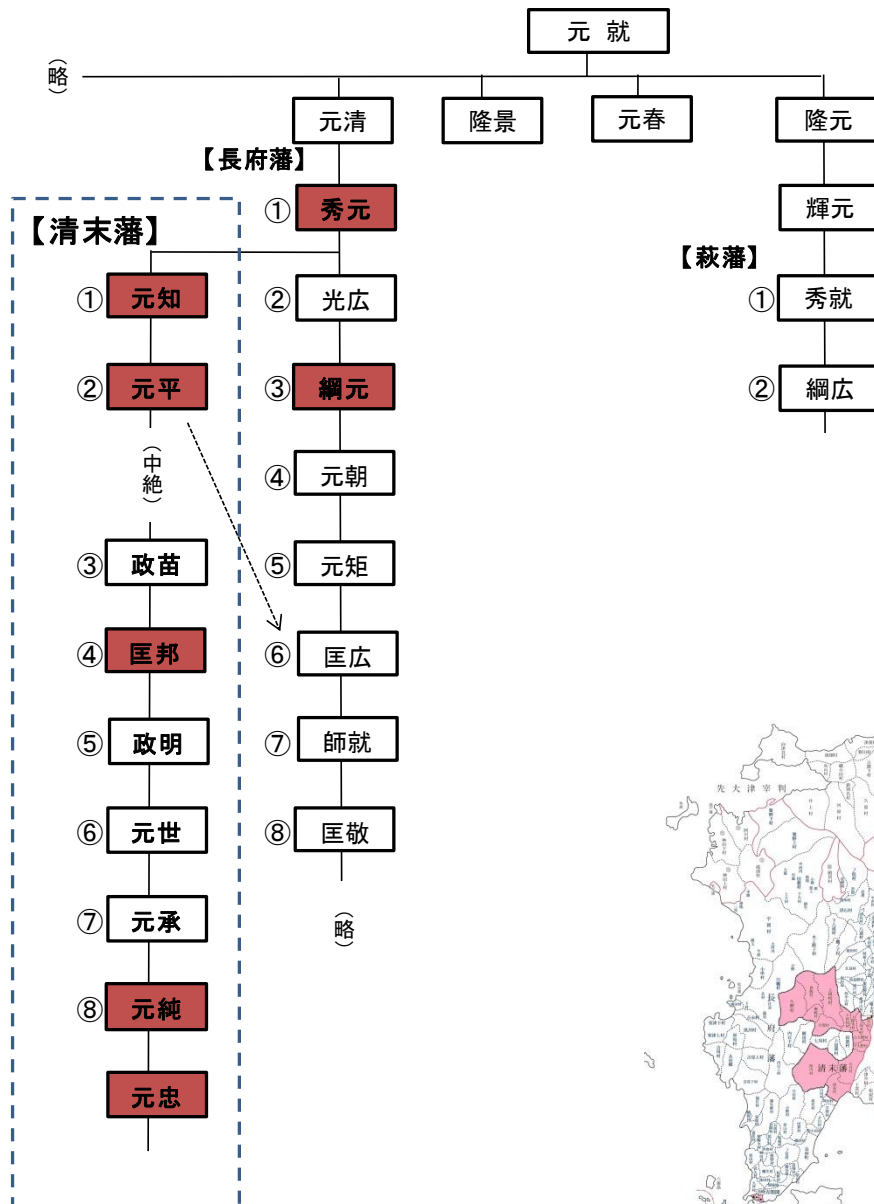
清末藩とは

清末藩は、長門国豊浦郡清末村(現下関市清末)に陣屋を置き、同村など12ヶ村2浦を治めた小藩です。萩藩の支藩に当たります。承応2年(1653)10月、萩藩の支藩長府藩の3代藩主毛利綱元が、幕府および萩藩の許可を得て、叔父毛利元知(秀元2男)に1万石を分与し成立しました。

享保年間、長府藩5代元矩が早世し、清末藩2代元平が長府藩主を継いだため清末藩は一時断絶しますが、享保14年(1729)10月に再興しました。以後幕末まで存続しています。

歴代藩主の中では、学問を好み「文化人」としての評価が高く、藩校育英館を創立(天明7年<1787>)した4代匡邦、幕末期に萩宗家を支え、四境戦争などにも出陣し、明治初期には清末藩知事ともなった8代元純などが有名です。

明治期には当主元忠が子爵となり、明治34年(1901)、貴族院議員となっています。



清末毛利家家紋
幕府へ報告した紋の形



清末毛利家関係略系図